

能率論および人間工学に喚起された人間の概念——一九二〇年代前半を中心に——

川合 大輔

はじめに

現代日本において、大正デモクラシーと通称されている時勢の後半、すなわち一九二〇年代に差し掛かるにつれて、階級闘争^①が熾烈となり、社会の発見^②が進んできたことは、贅言を要しない。一般論として、「階級闘争とは、主として異種の所得を有する社会的団衆間の闘争」のことであり、社会の発見^①とは「人生への煩悶という自我の目覚めの形式」が「新たに拡張された」こと、すなわち「自我の発見から社会の発見へ」向かったことを指している^③。

これらの動静から察せられるように、日本思想史上、一九二〇年代は、まだ呼称として浸透していたとはいいがたけれども、つまるところ、社会的存在論^④が沸き立ってくる時期にあたる。文明批評家として知られる土田杏村は、一九二六年十月に上梓した『日本支那現代思想研究』(第一書房)において、日清戦争後からしだいに前景化した思想が第一次世界大戦後におよぶまでの流れを次のように述べている。

日本の思想界は、国家の専制的拘束力から先づ個人を解放せしめ、其の個人をして又再び国家とは違つた社会の統制下へ自らを所属させる方向へ進ましめたと言ふべきであり、今もなほ其の進みの途中に於てある^⑤。

また、一九二九年十月に上梓した『時事問題講座9 思想問題』（日本評論社）では、「少なくとも小学校を卒業したものであるならば、容易に理解し得る（中略）現代思想問題」の前提として、次のように述べている。

一 社会の中に住んでゐる個人は、単純に一人の個人として考へるわけにいかない。（中略）思想でさへも自分の頭の中から個人的に生産したものは無くて、個人的に生産したと自分だけでは信じきつてゐながら、いつの間にかその社会のイデオロギイを分有するに過ぎなかつたのだ。それ故に我々は今後一人の個人を呼ぶに「個人」の語を以てせず、「社会人」の語を以てするであらう。⁴

以上の杏村の言葉からもうかがわれるように、みずから「所屬」している「その社会のイデオロギイ」を反映させた社会的存在論が中心となつてきた日本思想界では、「個人」を——考えないという意味ではなく——前提とする思想は周辺のものとなつた。併せて、少なくともこの場合の社会的存在論は、相対の立場をとることになるので、広義における人間の本質論も比較的のみて後景に退くこととなつた。

とはいえ、たとえば、現象学の興隆のように、人間の本質論の方面においても、一九二〇年代の日本思想史、ある

いは当該期の人文・社会科学史を考へる上で看過できない思潮はあらわれている。短期間のうちに流布し、文化事象にも大きな影響を与えた能率論は、結果としてその代表になつた思潮といつてよい。この能率論とは、F・テイラー（Frederick Winslow Taylor）が主唱した「科学的管理法」（Scientific Management）の輸入をはじめ、文部省の外郭団体である生活改善同盟会が中心となつて推進した「生活改善運動」、そして経済学者である森本厚吉が主宰した文化生活研究会および文化普及会による「文化生活運動」など、関わる一連の「能率増進運動」を総称したものである。⁵

本来において能率論は、人間の本质論ではなく、商工業事業の経営改善や日常生活の合理化を主眼とする論理である。しかし、たとえば、法・経済学者として消費税提唱など先駆的な業績を残したことで知られる神戸正雄が、

人が成るべく少く働いて成るべく多くの結果を得たいといふことは、是ぞ改良進歩、文化の發達、能率増進の原動力であつて、其に刺戟せられて工夫努力を怠つてはならぬ。（中略）能率増進に全力を傾注することが啻に当面の政策上有益であるのみならず、広く人類の幸福を増進する上にも大切である。

と述べているように⁶、能率論は、量と質の問題をさしおきながらともかくも功利主義の立場をとつて、「人類の幸福」

論にまで引き上げられていった。もう一つ例を挙げておくと、上記・文化生活運動でも類似の趣旨が認められる。森本は、次のように述べている。

現代人類の目標とすべき生活の標準は「生活の能率的標準」と称する者でなければならぬと思ふ。此の標準を保てる生活を普通に「経済的生活」(経済生活に非ず)、「能率的生活」又は「能率生活」或は「文化生活」と称するのである。(中略)文化生活と云ふのは(中略)新時代に適した無駄のない能率の多い且つ楽しい生活を意味するのである。⁽⁷⁾

引用文の他、森本の文章では、頻繁に「快樂的欲望の満足」が訴えられている。このように、帰するところ能率論では、「快樂」すなわち「生活感情の増進又は之を妨ぐるものを除却するより起る満足の感情」と「無駄のない能率」とを、不離一体のものともなしていた。そのため、この認識ののつとれば、「能率増進」の帰結は「人類の幸福を増進することになり、「人類の目標とすべき生活の標準」の帰結は「能率増進」に目を向けたものとなる。

そして、以上の論法を前提とする能率論に、「人間工学」(Human Engineering)も接触する。日本型斯学の濫觴は、古澤聡司氏が、次のように記しているとおりである。「日本における人間工学または精神工学的研究が始まるのは、一

九一四(大正三)年から一九一七(大正六)年にかけてのことだと言われている。その第一の原因は、近代産業の成長が心理学を必要とするまでに発達したことである⁽⁸⁾。その後、一九二〇年代に差し掛かるとしだいに人間工学は、佐々木聡氏による次の説明にみられるように前景化していく。あるいは、学問としての型がぼんやりとできあがってくる⁽⁹⁾といつてもよい。

第一次世界大戦後の(中略)一九二〇(大正九)年には、心理学研究会の研究誌『心理学研究』四月号(通号第一〇〇号)で人間工学特集号が組まれ、(中略)その後科学的管理運動の担い手となってゆく人びとによる論稿が掲載されている。翌一九二一年三月には、田中寛一著『人間工学』も出版された⁽¹⁰⁾。

引用文中にみられる田中『人間工学』(右文館)については、その内容は疲労と能率に関する実験的研究成果のものであり、現在の人間工学研究の内容とはほど遠いと評されている⁽¹¹⁾。したがって、それほど日本型斯学の滑り出しは、能率論とおおよそ軌を一にするものだったとみられるわけである。なお、田中『人間工学』の巻頭には、人間工学を日本に伝達した松本亦太郎による紹介文が寄せられている。松本は、次のように記している。

古来学者は人間を研究するに際し、或は身体的方面を措て精神的方面を考察し、或は精神的方面を措て専ら身体的方面を取扱ひ（中略）因襲の久しきに互り、斯の如き偏面的考察が研究法の正しきを得たるものとせられ、人間の研究とし云へば、其孰れかの方面よりするに限られて居つた。

この従来「人間考察法」に対して人間工学は、人間への「新研究法」として「精神身体的の作動を其対象」としながら「人間力の最も効果ある利用法の基礎」を考察する。

以上、人間工学を含有する能率論は、商工業事業、あるいは上記・松本の紹介文にみられる言葉で「産業、交通、教育、軍事、実業上の機関の大発展」に誘起され、人間の本質の再検討を掛け持つことになった。先にもふれたように能率論は、本来において「新時代に適」するための論理であるが、快樂と能率と人間力を追求するということはすなわち、社会的文脈の根底に横たわる人間の性質および能力そのものを追求することでもある。それゆえ、「人類の幸福」「人類の目標」「人間の研究」というような、冒頭で示した社会的存在論とは本来相容れない言辞がみられるわけである。

それでは、以上の能率論、そしてそれと連係する人間工学は、どのような理由でどのような「人類」もしくは「人

間」の概念を喚起したのであるか。これが本研究の問いである。繰り返し述べるように、結果として能率論および人間工学の見地は、一九二〇年代日本における人間の本質論の代表になった思潮といつてよい。それにもかかわらず、従来の関連する研究では、この事柄に焦点を当ててこなかった。また、日本思想史研究では、多くの知識人がなんらかの言論を遺しているにもかかわらず、能率論および人間工学そのものを看過してきた。それゆえ、本研究の成果は、能率論および人間工学に関連する研究と、一九二〇年代以降を時期範囲とする日本思想史研究に一石を投ずるはずである。

一、人間工学の導入にともなつて

一九一九年七月、『心理研究』第九一号誌上に掲載された「アメリカの自然と人文と心理学」において、本稿「はじめに」で挙げた松本亦太郎は、次のように述べている。

心理学界（中略）全体の研究を概括して申上げるのは不可能であります、然し今後益々有力の方面になる傾向のあるものは、昨年の末、米國心理学会の席上で、ソーンダイク、ドッジ氏等が発表した思想であつて、それは心理学を以て人間工学（Human Engineering）

としやうとする説であります、今後は此の方向に向つて発達して行くこと、考へられます。¹⁴⁾

この松本の言明から約一年後の一九二〇年四月、これも「はじめに」で挙げたように、『心理研究』誌上で第一〇〇号の発刊を記念して、正確に記すと「能率研究 人間工学」の特集号が組まれている。執筆陣は、松本亦太郎・淡路円治郎・入沢宗寿・下沢瑞世・福谷益三・上野陽一・久保良英・佐久間ふき子・鈴木久蔵・城戸幡太郎・田中寛一・寺沢巖男と、心理学の他、教育学・社会学・経営学・精神分析学・医学などに関わつた知識人たちが構成されている。

それぞれ人間工学を含む興味深い能率論を示しているが、本研究の問題意識と関連するものとして重要なのは、以下の三篇である。第一は、松本「人間工学」である。松本は、人間工学にまつわる前史を詳細に論じた後、次のように述べている。

人間工学なる名称が強く人の心に響く様になつたのは一は世界大戦の影響による如く思はれる。(中略) 米国では戦争の目的の爲め社会の諸方面より機械力を徴発すると、同時に鋭意人間力を徴発した(中略) マン・パワーなる語が一種の流行語となり遂には軍事上のみならず、工場を始め社会の諸方面に於いて多数の使用人を要する場合にも適用さるゝに至つた。既に人

間を力と観れば、此力の性質は如何なるものであるか、又此力を最も有効に使用する方法は如何と云ふ問題が起る、此問題を解決する学科を人間工学と称するのは、妥当の用語である如く感ぜらるゝに至つた。

前掲・松本論説に示されているように興つた人間工学は、第一次「世界大戦の影響」という後押しがあつた。「人間を力と観」る、という意味で「人間力」を欲したアメリカ社会の文脈と心理学の趨勢との相関によつて、にわかに耳目を集めたわけである。とはいへ、一部では、人間工学は「全く人間を牛馬視し或は機械視する事になつて人間を虐待する事になりはしまいかと懸念する」声も上がつていたようである。そのような考えを松本は、「誤解」であるとす。そして、次のように斯学の意義を力説している。

人間工学は最小の労を以て最大の効を挙ぐる途を示さんとす(中略) 人間に無駄骨を折らせない途を明にしやうと人間工学は努めて居る(中略) 人間工学の示す法則に従ひ、休憩時間を分配し、睡眠時間を定め作業交代の時刻を配置すれば最も早く又最も完全に疲労を恢復せしむる事が出来る(中略) 人間工学は(中略) 人々に夫々適當なる仕事を課する途を明にせんとするものにして、不遇の境に立ちて働く苦痛を未然に防止せんとす。¹⁵⁾

この言明から確認できるのは、人間工学は「はじめに」で示した能率論と鍵概念を正しく共有していることである。念押しとしていえば、言明にある「無駄骨を折らせない」「時間」「疲労」「人々に夫々適当なる仕事を課する」というのは、能率論の始まりとして科学的管理法が紹介されるようになってきた一九一三年十一月の段階で、先に挙げた上野陽一が Scientific Management の基礎としてそれぞれ説明している¹⁶⁾。それゆえ、人間工学とは、功利主義と快楽と能率を鍵概念とする能率論に、「力」から「人間」をとらえる発想を織り込んだものといえる。

以上と関わって、第二に重要なのは、鈴木「能率運動と心理学」である。鈴木は、「能率運動によつて破壊されたコンヴェンション」(因習)の最たるものとして、「能率上から見た労働の価値(中略)能率の human character」を挙げる。続けて、次のように述べる。

旧来の工場管理では新式の機械を使つたり計理のシステムを改正したりすることは能率を増進する所以だと思はれてゐたけれども、労働に至つては給料を沢山出して熟練職工でも多くすれば兎も角、さもなくば同一の職工を持つて労働の能率を増進する事は不可能だぐらゐに思はれてゐた。

鈴木によると、このような認識に対して科学的管理法お

よび「能率運動」は、実は「労働こそマネージメントの最も重大な要素」だったのだ」と、認識をあらためさせていったわけである。かくして、次は、さらに精密にこの「現象を学問的に考へる段にな」つてくる。そこで、次のような動きとなつたわけである。

殊に心理上の理由は(中略)あらゆる作業に関係があるのみならず、微妙なる精神の機能による熟練の如きは心理学の知識以外には之を探究する手懸りがないと云ふやうな事から、(中略)心理学的の能率研究が勃興したのである¹⁷⁾。

以上のように、鈴木論説では、主として「工場」にまつわる「労働」概念の転換を機に、「労働の能率」に沿うかたちで、人間の「心理」もしくは「精神」を究明するようになつてきた情勢が示されている。そして、その先端を形づくっているのは、既述のことから、「心理学的の能率研究」と人間工学との接触である。

この「歴史的には人間工学なる者は心理学的研究の帰結として産れた者である」ことと、「労働の能率」に沿つて究明されていく「心理」(精神)をふまえて、第三に、城戸「文化の改造と心理学」では、以下のように示されている。

人間なる概念は如何なる者かと思へば、精神なる意味

が考へられてゐる以上無機有機精神なる三種の連続を綜合する連続概念である。而して此の三種の連続を更に統一せしむる者は仕事なる概念である。仕事なる概念を導入することによりて精神的なる意志と有機的な身体とが連続してくる。

このように城戸は、「仕事なる概念を媒介概念として」、あるいは「統一的に連続せしむる極限として」すえて、そこから人間をとらえなければならぬと主張する。

先のとおり、「心理」「精神」は、「労働の能率」に沿つて究明される情勢となつてきたのであつた。ところで、この「労働」とは、主として「工場」にまつわる範囲のものであつた。それが進んで、「工場」に限ることなく、広く「仕事なる概念」を考へることによつて、はじめて「人間なる概念」を了解できるとする発想がでてきたわけである。この発想は、とくに城戸独自のものとはいえない。その理由はそのまま、本節で論じてきたことについての確認事項である。「人間を牛馬視し或は機械視する」のではなく、その逆の立場に基づき、人間の「心理」「精神」を主として「工場」ないし工業にまつわる「労働の能率」に沿つて究明するとりくみに歩を合わせ、さらに思ひきつて、先に「人間なる概念」があつてそこからその備わる「力」を考へるのでなく、先に「工場を始め社会の諸方面」で

求める／求められる「力の性質」があつてそこから「人間なる概念」が成り立つと提起していたのは、人間工学であつた。

なお、斯学を含み広く「心理学的の能率研究」の企図にしたがえば、なるほど松本が述べるように、少なくとも労働上「人間を虐待する」と考へるのは、「誤解」である。なぜなら、そもそも、「工場を始め社会の諸方面」で求める／求められる「力の性質」に合わせて、「人間なる概念」そのものがかたちづくられていくからである。つまり、「人間なる概念」が先にあるわけではないので、道理からして、すでに意味づけられている「人間を虐待する事」などどうしてもできないのである。しかも、「人間なる概念」に関する意識は、「労働の能率」に沿つて人間の「心理」「精神」が究明されればされるほど、「牛馬」「機械」よりも「労働」あるいは「仕事」に適する格好をとるようになっていく。それゆゑ、労働上「人間を虐待する」と考へるのは、まったくの「誤解」なのである。

二、能率論および人間工学によつて喚起された「人間なる概念」

能率論は、搖籃期である一九一〇年代から、しばしば非難を受けていた。その内容は、あらかた、「能率を増進さ

せ過ぎて人間を機械扱いに」するので「人間の幸福といふ立場から見ると由々しき一大事である」というものであった。つまりは、前節で示した人間工学に対する危惧の念と同様である。

だが、佐々木聡氏『科学的管理法の日本的展開』（有斐閣、一九九八年）において、「一九二〇年代初頭から二〇年代を通じて、政府と財界団体は科学的管理法についての認識を深めていった」、「教育機関における講座の開講や専門雑誌の発行によって、ひろく普及させる動きが活発になるとともに、それらの諸原則や諸手法を実践に移す動きがみられるにいたっている」とあるように、一九二〇年代に差し掛かると、たとえ一部の知識人がどのように考えようとも、科学的管理法を中心とした能率論は、社会のあらゆる方面を席卷していくようになる。当時の状況を、官僚として名を馳せた安武直夫は、「能率増進の要——文書事務打合せ開催に際して」（『朝鮮』第八九号、一九三二年八月）において次のように述べている。

近頃は世界を通じて能率——エフィシエンシー——と云ふものが非常に研究さるゝこととなり、文明文化の研究と云ふことは畢竟何に帰着するかと言へば能率問題に帰着すると云ふことすら言はれて居る位で、（中略）役所の事務（中略）教育（中略）人類社会若くは国

家に於ける全産業（中略）総ての方面に於て喧しく論ぜらるゝ様になつて来たのであります。⁽²¹⁾

このような情勢のただなかで、既述のとおり人間工学が起りかつ能率論と連係していくことになる。これを受けて、たとえば、「はじめに」で挙げた『生活改善運動』の立役者として磯野さとみ氏『理想と現実の間に生活改善同盟会の活動』（昭和女子大学近代文化研究所、二〇一〇年）でも大きくとりあげられている乗杉嘉寿は、「能率増進と教育の改造」（『社会と教化』第三巻第七号、一九三三年七月）において次のように確言している。

従来の能率問題は機械力の増大が主要な問題であつたのであるけれども、今日に於ては、これと同時に人間の力と云ふものも考へねばならぬ（中略）機械力を主宰する所の人間力の増大を図ることが、其の主要なる問題となつて来たのである。⁽²²⁾

以上のことから、「人間力」として求める／求められる「人間なる概念」が、ますます考えられるようになってきた。

この場合、「人間なる概念」の生理ないし身体機能にのみ着眼するわけにはいかない。なぜなら、そのような考えでは、市川弘「人間工学とエフィシエンシー——能率増進は経営学の根本目的」（『朝鮮公論』第一一卷第五号、一九二三

年五月)にあるように、いわば「肉と骨で作った人間即人体機械を研究する」ことに集中してしまうので、これまでに論じてきた能率論の動向に反するからである。それゆえ、もちろん生理機能に関する研究は必要であるけれども、それにもまして、「機械は(中略)意志を所有せない(中略)然るに人間は個々に意志あり、感情を有し自動的であるが故に常にその境遇と位置に満足し難い」ことをふまえ「人間なる概念」を考えなければならぬ。

そこで、前節でも示したように、「心理」「精神」あるいは「意志」「感情」なる上記・市川の論説にみえる言葉を借りればそれ自体「無形なもの」が、能率論の文脈にのつとり「労働」「仕事」を様式として考えられていく。見出された解答は、当然、「人間なる概念」の重要な地位を占めるものである。併せて、念押しとしていえば、この「人間なる概念」は、「人間力」の前提ではあるけれども、そもそも「人間力」に要請されたものであるから、先に「工場を始め社会の諸方面」で求める／求められる「力の性質」すなわち「人間力」があつてそこから成り立つものである。

これら「工場を始め社会の諸方面」で求める／求められる「力の性質」(「人間力」と、「労働」「仕事」を様式として考えられるそれ自体「無形なもの」を両輪として、「人

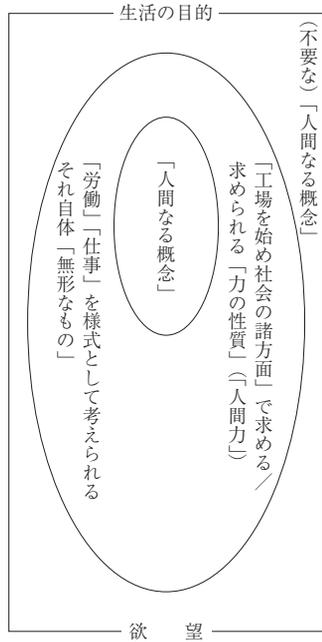
間なる概念」を組織する思潮を教育学者であり現場の教育にも努めた野田義夫は、「はじめに」で挙げた文化普及会機関誌『文化生活』第二巻第一・二号(一九二四年一月)誌上に分載された「生活と能率管理せられた霊肉合流生活」において次のようにまとめている。

吾々の精神(中略)活動を最も科学的に、即ち合理的に仕事に有利なるやうに導くのが、(中略)人間の能率増進に他ならぬ(中略)人間の能率増進は機械工場のみに限られたものではない。(中略)其原理は一様に機械を用ゐない会社、商店、官衙、学校、病院等にも適用することが出来る。

そして野田は、先の両輪の軸となるものは「欲望」であるとす。さらに一歩進めて、「人間の欲望は生活の目的を意味する」と断言する。²³⁾

以上の野田の言明を含め、能率論および人間工学によって喚起された「人間なる概念」を図示すると、おおよそ次頁の図のようになる。

「人間なる概念」 a ならば「人間力」になると共に、「人間なる概念」 a ならば「労働」「仕事」に適合したそれ自体「無形なもの」を有する。だが、見方を変えて、「人間なる概念」は、上記のように a かもしれないけれども、「人間なる概念」 β や γ などになるかもしれないので、「人



間力)になると共に「労働」「仕事」に適合したそれ自体「無形なもの」を有するならば、ただちに「人間なる概念」 α である、とはいえない。つまり、能率論および人間工学を推進するほど、相応する「人間なる概念」そのものがかたちづくられていくわけであるが、それではまだ能率論および人間工学が求める「人間なる概念」が十分に成立しない。そして、このことは、永久に同様である。

このように論理として考えたとき、能率論および人間工学を推進する側にとって最善の手立てとなるのは、関わる全事象をあらかじめ規定して、求める「人間なる概念」から求めない「人間なる概念」をとりのぞくことである。ところで、その関わる全事象をあらかじめ規定するのは、生存活動の根本として考えられる事柄が望ましい。そこで、

「生活の目的」と「欲望」が選ばれる。前者に関しては、当然の結果といえる。また、後者に関しても、一九二〇年代以前から、たとえば、近代日本における本格的かつ代表的な国語辞典として知られる上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』(富山房・金港堂、一九一五—一九一九年)において、「不足を感じてこれを満足せしめんと希望。ほつしのぞむこと。ほしがること。又、その心。」と定義されている²⁵⁾他、二〇年代以降に出版された国語辞典においても、落合直文が編纂した『ことばの泉』(大倉書店、一八九八年)を芳賀矢一が先導して「改修発行」したことで知られる『日本大辞典 言泉』(大倉書店、一九二二年)に「ほしと思ふこと。ねがひ。のぞみ。」と定義されており、心の働きをあらわす概念として通用していた。併せていえば、既述のとおり、それ自体「無形なもの」あるいは快楽(生活感情の増進又は之を妨ぐるものを除却するより起る満足の感情)を追求する能率論および人間工学と相性のよい概念でもあった。それゆえ、後者の「欲望」もまた、関わる全事象をあらかじめ規定する事柄として適当であるといえる。

両者を結合すると、先に野田が述べていた「人間の欲望は生活の目的を意味する」となる。この規定にのっとりれば、既述のように「文明文化」「人類社会若くは国家」にとって能率論および人間工学の見地が有効であると考えら

れていくほど、たとえ「生活の目的」と「欲望」を有する「人間なる概念」であつても、「人間力」にならないと共に「労働」「仕事」に適合したそれ自体「無形なもの」を有しないならば、それは「文明文化」「人類社会若くは国家」にとって有益な「人間なる概念」ではないと考えられることになる。しかも周知のとおりお誂え向きに、たとえば、「はじめに」で挙げた神戸正雄が著した『財政経済及社会叢書 第二冊 社会問題』（日本図書出版、一九二〇年）に示されているような、「生活の目的」と「欲望」にまつわることから非難があつた。

個人が快樂を享受することを全然排斥するものに非ず。却て之を尊重するに吝ならざるものなれども、（中略）之に耽溺し、遂に国家社会の福祉を無視するに對しては飽迄反対の態度を持する者なり（中略）動もすれば享樂主義に流れ、自己の享樂の爲めに社会の損害を顧みざるに至ることは認めざるべからず。

それゆえ、以上の論理にしたがえば、能率論および人間工学が求める「人間なる概念」からそれらが求めない「人間なる概念」をとりのぞくことは、能率論および人間工学を推進する側のみならず、社会一般に歓迎される努力となる。そして、本節の冒頭で示したように社会機構は、その努力を惜しみにく後押しする意向を示している。

三、質と量の観点からみつめて

「人間なる概念」のかたちづくりは、前節で論じた規格に基づき進められていく。ところで、これも前節までに示したように、能率論のかたわらでは、非難の声が連れ立って歩いた。一九二〇年代終盤に差し掛かっても、たとえば、石巻良夫「能率病患者」（『映画往来』第五卷第四四号、一九二八年九月）において、「映画会社の重役は能率増進病といふ厄介な病氣にとりつかれてゐる。（中略）一にも能率、二にも能率である。（中略）とても正気の沙汰とは思へない」とあるように、社会のあらゆる方面に難なく染み入っていく能率論的一幕と、その状況に半ばあきれたような非難の声を確認することができる。

しかしながら、能率論、これに連係する人間工学、そして両者を後押しする社会機構が三位一体となつて進める「人間なる概念」をかたちづくる規格そのものに分け入っていくたぐいの弁駁は、めずらしい例といえた。一般に非難の主題となつたのは、「人間を虐待すること」、「機械扱いに」すること、そして上記・石巻の論説にもみえるように「労働を搾取すること」であつた。それゆえ、実のところこれらの非難は、既述のことから、これらの非難が起き

る理由を考える能率論および人間工学の志向に与するものであった。そうなると求められるのは、「能率病患者」の側もこれを非難する側も等しく、能率論および人間工学の真意を正しく理解することにあるといえた。この場合、かの「人間なる概念」をかたちづくる規格そのものを変更しなければならぬ理由など、どこにも見当たらない。

以上とは行き着く先が異なるめずらしい弁駁、すなわち「人間なる概念」をかたちづくる規格そのものに分け入った例としては、「はじめに」でも言論をとりあげた土田杏村の文化生活運動批判が挙げられる。その批判の矛先は、直接には、これも「はじめに」で挙げた森本厚吉の思想に向けられたものであった。能率論に基づく森本の文化生活論に対する杏村の弁駁は、『解放』第二卷第九号・第一二号（一九二〇年九月・十二月）誌上に「享樂的なる所謂文化生活論を排す」として分載され、後に『文化主義原論』（内外出版、一九二一年）に収録されている。併せて、「森本博士の文化生活論の価値」（『文化』第二卷第六号、一九二二年九月）と本論説を収録した『文化哲学入門』（中文館書店、一九二三年）でも展開されている。なお、森本の側は、「物的文化生活論——私の文化生活観疑義に答ふ」（『文化生活』第一卷第七号、一九二二年十二月）において、上記の『文化主義原論』および「森本博士の文化生活論の価値」に対して反論

を行っている。

杏村による森本・文化生活運動批判の要点は、以下のとおりである。

- (一) 森本「博士はどの論文の中でも能率問題を非常に重要なもの、如くに論じて居られる」。
- (二) 量的に見たる最大多数の最大幸福を無上の人生論想と見、或は此れを換言して、経済行為の理想は『個人及び社会の富力を大にする』事であると主張する。森本博士の所説は正に其れである³⁰。
- (三) 森本「博士の理想とせられる処は、『最大多数の最大幸福』といふ功利主義のモットオに尽きて居る³¹」。
- (四) 森本博士の文化生活論なるものは、人生の理想を価値の上に置かず、快樂の上に置くものである³²。
- (五) 其の他の推論に於ても、博士の論は同様方法的に、生活の質の問題を、量の問題に転嫁する危険性を包含する³³。
- (六) 結論として、「性質的に異なるあらゆる幸福は、すべて性質的に同一なる、同一基準の幸福に量的に換言し得られる（中略）森本博士の所謂『文化生活』は、（中略）『人類社会の能率と幸福』とを増進する事を目的としたる生活である。（中略）其れはたゞ量的に標価されるのみである³³」。

以上の批判に対して森本は、杏村とは「専門」「出発点」「立場」が異なるので「彼れ是れと比較的に論戦す可きものではない」と繰り返しながらも、以下のように反論している。

(一)「私が快樂と云ふのは英語のマン・ホート^マで決して悪い性質のものではなく、此欲望を満足させると直接又は間接に生産的エナージーを大にするものである。私共の文化生活と云ふのは実に此の快樂的欲望を全ふする事によつて、能率生活の標準を保つ事が出来ると云ふところに重きを置くのである」。

(二)「文化生活の特徴は、確に能率の高い事であらねばならぬ。(中略)現在の大問題なる労働問題に於ても、労働者が自己の生活の向上と、社会的地位を高くする事が目的であるならば、(中略)先づ個人的には自分の能率増進に努力して、現代人として必要な資格を具ふる事が肝要である」。

(三)「文化生活に於て質が大切である事は当然の事である。けれ共(中略)質的論に入る前に量的論をなさねばならぬと思ふて主として物的文化生活を研究して居るのは、経済学徒として当然の事である。(中略)処で私の考へでは質と量とは極く密接な關係を有して居るもので、量的觀の乏しい質的觀は屢々正鵠を失するもので

ある³⁴⁾」。

以上の議論は、両者の論説が發表された時期をみると分かるように、人間工学が起りかつ能率論と連係していくさなかのものである。そして、以後、社会機構の後押しを伴つて、「人間なる概念」をかたちづくる規格は動かしがたくなつてくるのであつた。ところで、先にもふれたように、その「人間なる概念」をかたちづくる規格そのものを變更しなければならぬ理由は、本来どこにも見当たらないのである。なぜなら、「人間を虐待する」こと、「機械扱いに」すること、「労働を搾取する」こと、これらの非難は、帰するところ「人間の幸福といふ立場から」なされたものである。そうである以上、「人間を牛馬視し或は機械視する」認識をあらためさせる「人間力」を提唱し、「人間は個々に意志あり、感情を有し自動的であるが故に常にその境遇と位置に満足し難い」ことを究明し、さらに「人間の欲望は生活の目的を意味する」からこそ「自己の享樂の爲めに社会の損害を顧みざる」ことに注意を払うのは、非難されるはずのない美挙となる。それゆえ、これらの知的営みをふまえながら能率論および人間工学によつて喚起された「人間なる概念」をかたちづくる規格は、非難されたり變更されたりするどころか目的とされるべきものなのである。

ところが、杏村は、能率論に正しく準ずる森本の思想を上記のとおり弁駁した。繰り返しになるが、「人間の幸福といふ立場から」みると、能率論および人間工学への非難は「誤解」にすぎないのであった。より正確にいえば、不当なものであった。それゆえにこそ、仮に「人間の幸福といふ立場から」みて、「人間を虐待する」こと、「機械扱いに」すること、「労働を搾取する」ことといった非難の聲が正しいのであるならば、能率論および人間工学によって喚起された「人間なる概念」をかたちづくる規格は、とり上げられなければならない。「人間の幸福」を阻んでしまふからである。

ところで前節で示したように、能率論および人間工学によって喚起された「人間なる概念」には、「人間の欲望は生活の目的を意味する」といった根本義、あるいは原理的な「立場」があった。これは森本の言葉でいえば、「快樂的欲望を全ふする事」となる。この根本義があつてはじめて、能率論および人間工学の見地が有効となつてくるのであった。また、「両者の求める「人間なる概念」をかたちづくることができるのであった。それゆえ、能率論および人間工学によって喚起された「人間なる概念」をかたちづくる規格が、「人間の幸福といふ立場から」みて正当なものだとされる以上、「快樂的欲望を全ふする事」と「人間の

幸福」とは同義になる。併せて、「欲望」とは、要するに「不足を感じてこれを満足せしめんと希望」のことであつた。その一例として、森本が述べていた「労働問題」においては、「労働者が自己の生活の向上と、社会的地位を高くする事」となる。

すると道理上、「人間の幸福」は、第一に、どのくらい「快樂的欲望を全ふ」したのか、たとえば「自己の生活の向上」をはかることができたのか、「社会的地位を高くする事」ができたのか、といった程度ないし「量的」なものとなる。これに合わせて、第二に、「人間なる概念」も「量的」にかたちづけられることになる。そうでなければ、「人間の幸福といふ立場から」みて、能率論および人間工学によって喚起された「人間なる概念」をかたちづくる規格の正当性を説明することはできない。これら第一と第二のことから考えて、第三に、能率論および人間工学の見地は、「人間の幸福」すなわち「人間の欲望は生活の目的を意味する」(「快樂的欲望を全ふする」)ことを根本義としながら、相応する「人間なる概念」をかたちづくる管理の役割を担っているのだ、「心理」「精神」「意志」「感情」すなわちそれ自体「無形なもの」のあつかいも含めて、必然的に「量的」なものが前提になっている。以上のことから、第四に、「社会」「労働」「仕事」など、「生活」にまつ

わるあらゆる事柄において「人間の幸福」は、一意的な尺度ではかることができる。まさに杏村が述べていたように、「性質的に異なるあらゆる幸福は、すべて性質的に同一なる、同一基準の幸福に量的に換言し得られる」わけである。

こうして、能率論および人間工学によって喚起された「人間なる概念」をかたちづくる規格では、すべて「量的に標価マされる」ことが分かる。この場合、「人間の幸福といふ立場から」みると、かぎりなく「幸福」に近くても、かぎりなく「幸福」に近くなく規格外に対して、「人間を虐待する」、「機械扱いに」する、「労働を搾取する」などと非難するのはなんら不当なことではない。しかしながら、見方を変えれば、かぎりなく「幸福」である場合は、完全に「幸福」とはいえないけれども「幸福」の「量」は多いことになるし、かぎりなく「幸福」ではない場合もまた、わずかな「幸福」の「量」を保有することになる。そのため、「人間なる概念」をかたちづくる規格は、たとえどれほど不当なものであるうとも、ただちにとりさげることができないのである。なぜなら、「人間の幸福」を阻んでしまうことになるからである。

以上のことから、杏村の文化生活運動批判のように、「人間なる概念」をかたちづくる規格そのものに分け入っ

ていくたぐいの弁駁があつても、結局、当該規格をめぐる審判は先送りとなる。核心である「質と量」をめぐる論理上の宿題は、たとえば、注(8)で挙げた大日本百科辞書編輯部編纂『哲学大辞書』において次のように記されているように、かねてから提示されていた。

質は(中略)「此」と「彼」とを区別せしむる所以のものなり。(中略)例へば水と氷と水蒸気とは質的差別なり、然れども其は熱即ち勢用の度の差なり(中略)科学者は光・熱・香・味・音等の各に有する質的差別を量的に配列し、進んで其等相互をも量的に組織せんと企図す。(中略)然れども若し此の企図が成就したりとせば、其は吾人に果して何の影響かある。光は依然として光なり、音は依然として音たるべし。即ち質的差別ありてこそ、吾人の生存は意味あり、然るに其を単に量的差に帰着せしめんとするは、恰も食物調理の一切の方法を止めて、滋養となるべきエキス分のみを食せよと言ふに等しからん。³⁵⁾

念押しとしていえば、「質と量」のどちらを論理上先行させるのかというのは、先に森本が述べていた「専門」分野とはあまり関係のないことである。なぜなら、これも一例として、森本と同様の「経済学徒」である出井盛之は、「快樂経済」と本能派の社会理想」(『解放』第五巻第四

号、一九二三年四月)において、「快樂經濟学者によれば、人間の幸福は欲望の満足にありとせられて居る」、その見地をもとにして「これまでの社会改造家によつて空想された理想社会は、余りに欲望満足式であり、welfare 流であつた」と非難している。この出井の言論は、杏村の弁駁に対して「専門」分野を抛り所とする森本の反論を打ち砕くかたちとなるからである。

ともあれ、再三示してきたように、たとえ一部の知識人がどのように考えようとも、「人間なる概念」のかたちづくりは、能率論、これに連係する人間工学、そして両者を後押しする社会機構によつて進められていく。「質と量」をめぐる論理上の宿題をかかえながらも、なんらひるむこととなく進められていく。結果として改元間近となつた一九二六年五月、『婦人之友』第二〇巻第五号誌上に掲載された「趣味と能率との調和」において、政治家・文明批評家として名を馳せた鶴見祐輔は、「日本文明、乃至は日本生活」を「質の文明」^{クオリティ}、「西洋の文明」ないしは「能率本位の西洋生活」を「量の文明」^{クォンティティ}と定義した上で、次のように述べている。

我々は古き日本の生活に別れなければならぬ時代に臨みながら、淡き懐しみを以つて、恋々としてゐる、といふのが、多くの人の心境ではないかと思ふ。しかし、

時代の圧力は容赦もなく、かゝる感情を一掃してゆく時流の水面に淡く映る「質」の上に棹さし、その像を穿ち揺らしながら、すべて「量的に標価される」新しい「生活」に向けて、「人間なる概念」に関わる全事象は進められていくのである。

おわりに

本研究では、能率論および人間工学が、どのような理由でどのような人間の概念を喚起したのであるかを問うた。そして、思想史研究の立場から喚起された人間の概念に、能率論および人間工学によつて喚起された人間の概念に分けると、その志向と規格は、特定の立場からみて正当なものであることが分かつた。それにもかかわらず、あたかも人間の本質論のように考えられる時勢となつてくることも分かつた。

そのようなただなかで、「はじめに」で述べたように沸き立ってくる社会的存在論は、どのような反応を示したものであるか。本質論とは本来相容れない論理ではあるけれども、仮に、「人間の幸福」すなわち「人間の欲望は生活の目的を意味する」(「快樂の欲望を全ふする」)ことを「人間」のみ任意のものに置き換えて根本義としたならば、相対の

立場をとる以上、収拾がつかなくなる。

この件に関して、現在のかたちへ向かう生活にまつわるあらゆる事柄、何より人間、狭義の日本人は、一九二〇年代以降を時期範囲とする日本思想史研究の成果を待っている。

注

- (1) 大日本百科辞書編輯所編纂『哲学大辞書「追加」』同文館、一九二六年、七五頁。
- (2) 有馬学『日本の近代4「国際化」の中の帝国日本1905-1924』中央公論新社、一九九九年、二七七頁。
- (3) 土田杏村『日本支那現代思想研究』四六頁。
- (4) 土田杏村『時事問題講座9 思想問題』一一二頁、一二四頁。
- (5) なお、能率論の先行研究および短期間のうちに流布した消息については、拙稿「日本型能率論勃興期における思想的文脈」(『人文学報』第一一〇号、京都大学人文科学研究所、二〇一七年七月)で詳説している。
- (6) 神戸正雄「節約運動より能率増進運動へ」、『時事経済問題』第三冊、一九二二年十一月、五頁。
- (7) 森本厚吉「單純生活と能率生活」、『改造』第二卷第一〇号、一九二〇年十月、六二一―六三頁。
- (8) 大日本百科辞書編輯部編纂『哲学大辞書』全七冊、同文館、一九〇九―一九二二年、二七六頁。
- (9) 古澤聰司「戦前・戦中日本における心理学(者)と日本」、心理学研究会歴史研究部会編『日本心理学史の研究』法政大学出版局、一九九八年、四四頁。
- (10) 佐々木聡・野中いずみ「日本における科学的管理法の導入と展開」、原輝史編『科学的管理法の導入と展開——その歴史的国際比較』昭和堂、一九九〇年、二二九頁。
- (11) 正田亘『増補新版人間工学』八頁。
- (12) なお、もはや戦後ではない」という言葉が出回って間もない一九五八年四月、『心理学評論』一号、二号誌上に掲載された清宮栄一「人間工学の歴史と最近の課題」においても、「当初の人間工学は産業の実際場面から出発し、その理論的解明を志向したものであり、これが近代の産業心理学や人間工学の基礎となったのである」と記されている(二七〇頁)。
- (13) 松本亦太郎「序」、田中寛一「人間工学」一一五頁。
- (14) 松本亦太郎「アメリカの自然と人文と心理学」、『心理研究』第九一号、九八―九九頁。なお、言明中にみられる「ソーンダイク」は、Edward L. Thorndike「ソーンダイク」は、Raymond Dodge のことである。
- (15) 松本亦太郎「人間工学」、『心理研究』第一〇〇号、三三三―三四頁、三三八頁。なお、頁数が大きい理由は、上

- 野陽一編『復刻版 心理研究34』（雄松堂出版、一九八五年）を典拠として用いているからである。
- (16) 詳しくは、上野陽一「能率増加の話」、『心理研究』第二三号を参照のこと。
- (17) 鈴木久蔵「能率運動と心理学」、『心理研究』第一〇〇号、四五六―五八頁。
- (18) 城戸幡太郎「文化の改造と心理学」、『心理研究』第一〇〇号、四六一―六三頁。
- (19) 鮫橋迂史「科学的経営法の社会学的批評（上）」、『財政経済時報』第二巻第四号、一九一五年四月、七一頁。
- (20) 佐々木聡『科学的管理法の日本的展開』一七頁、一三六頁。
- (21) 安武直夫「能率増進の要——文書事務打合せ開催に際して」、『朝鮮』第八九号、二八―二九頁。なお、当時の安武の肩書は、朝鮮総督府文書課長である。
- (22) 乗杉嘉寿「能率増進と教育の改造」、『社会と教化』第三巻第七号、二頁。
- (23) 市川弘「人間工学とエフィシエンシー——能率増進は経営学の根本目的」、『朝鮮公論』第一一巻第五号、八七―八八頁。
- (24) 野田義夫「生活と能率管理せられた霊肉合流生活」、『文化生活』第二巻第一号、一九頁、同『文化生活』第二巻第二号、一〇二頁、一〇六頁。
- (25) 上田万年・松井簡治『大日本国語辞典に——』一九一九年、一三三―六頁。
- (26) 本事項の引用は、落合直文著・芳賀矢一改修『日本大辞典 改修言泉』第五巻（大倉書店、一九二八年、四八三―六頁）を典拠とした。
- (27) 神戸正雄『財政経済及社会叢書 第二冊 社会問題』六四四―四五頁。
- (28) 石巻良夫「能率病患者」、『映画往来』第五巻第四四号、一二頁。
- (29) 土田杏村「享楽的なる所謂文化生活論を排す（上）」、『解放』第二巻第九号、八二頁。
- (30) 土田杏村「享楽的なる所謂文化生活論を排す（下）」、『解放』第二巻第二号、一七五頁。なお、ママを付した「論想」は、『文化主義原論』（前掲）では「理想」と訂正されている（一二四頁）。
- (31) 土田杏村「森本博士の文化生活論の価値」、『文化』第二巻第六号、五〇頁。
- (32) 土田杏村『文化哲学入門』三四八―四九頁。
- (33) 土田杏村「森本博士の文化生活論の価値」、『文化』第二巻第六号、五一―二頁。
- (34) 森本厚吉「物的文化生活論——私の文化生活観疑義に答ふ」、『文化生活』第一巻第七号、七頁、九―一〇頁、一二頁、一七―一八頁。なお、ママを付した「マン

ホート」は、文意から察するに comfort の誤字であると
考えられる。

(35) 大日本百科辞書編輯部編纂『哲学大辞書』全七冊、
一一八〇―八一頁。

(36) 出井盛之「快樂経済」と本能派の社会理想」、『解放』
第五卷第四号、一一頁。

(37) 鶴見祐輔「趣味と能率との調和」、『婦人之友』第二〇
卷第五号、三六頁。

(愛知教育大学非常勤講師)